敗北淫辱のコロシアム

COLOSSEUM OF LOSER

破れて堕ちる女戦士たち

小説 木森山水道　挿絵 未来電機

立ち読み版

ROUND 1　邂逅の乙女たち　復讐の母娘剣士と騎士とくノ一　006
ROUND 2　敗北の罪の浄化　高潔騎士の爆乳パイズリ、よがり鳴き初体験　032
ROUND 3　ロリくノ一の抵抗　子供口の巨根フェラチオ、無念の触手淫陵辱　080
ROUND 4　母性と肉欲の罠　解毒手段の誘惑逆レイプ、偽愛への洗脳性交　115
ROUND 5　堕ちた母が敵を手伝う、背徳の破瓜セックス　149
ROUND 6　最後の乙女剣士を襲う、三人の新参剣闘娼婦　188
FINAL ROUND　二月後の乙女たち　242

登場人物紹介

Characters

ティローネ
「銅の乙女」の二つ名で呼ばれる女傭兵。殺された父の仇であるノクシウスを追って、剣闘大会に出場した。

ウェレクンダ
ティローネとともに剣闘大会に出場している女傭兵。ティローネの母親で、復讐を誓う娘を心配している。異名は「強き大地母」。

クリスタ
剣闘大会に出場している女騎士。「薔薇の白騎士」の異名を持ち、名誉のために優勝を狙っている。

スズネ
大会出場者であるくノー。幼い外見とは裏腹に、「神出鬼没の影」の二つ名の通り、姿を隠しての戦いが得意である。

ノクシウス
剣闘大会『ロード・オブ・グラディエイター』を開催する国王。民からの絶大な信頼を得ている。

マントの下は裸――一糸纏わぬ、産まれたままの姿だ。
裸体には贅肉が一片もない。外見に反して筋肉が若干多く、凛々しく引き締まっていた。
香油を塗っているので、全身はテラテラと輝き、ハッカのいい匂いがしてくる。
（美しい身体つきですけれど……ああ、男性のアレが……！）
処女騎士を狼狽えさせるのは、股間に生えた逸物だった。
それは、成人男性と結婚している同僚や部下や友人が話していたものとは――、
（全然違いますわ！　いったい何ですの、これはっ）
人間の身体の一部とは思えないサイズのペニスがそそり立つ様子には、圧倒される。
「ハッ！　ああ、は、早くマントを……肌をお隠しになって！」
我に返るや否や、自分の顔を両手で覆い、処女騎士は叫ぶ。
すると、下から腕を掴まれ、荒々しく引きずり倒された。
「何をなさ――ヒィッ！」
膝立ちの体勢になったところに、鼻先へ勃起ペニスを突きつけられた。
十代前半の子供みたいな外見に不釣り合いで、成人男性の標準を越える巨根をだ。
熱り立つ生殖器の猛烈な熱が顔を、強い牡の臭いが鼻を殴りつけてくる。
「どうだい。君は今、最高級のチンポを見ているんだよ」
ノクシウスは、七万人の前で大事な部分を晒しているのに、得意げな顔をしている。
――キャ――ッ！　ノクシウス様の巨根チンポ様よォ！――

――いつもながら素敵だわぁ……犯していただきたい……――

女たちが、ピンク色の歓声を張り上げている。

「いやらしいその処女爆乳で、このチンポを挟んで奉仕してもらう。パイズリだね」

「ぱいずり……？　ちんぽ……というのは、ペニスのことのようですけれど……わたくしの胸でペニスを挟んでご奉仕する……？　……意味がわかりませんわ……」

ペニスから目を伏せて首を傾げると、ノクシウスが続けた。

「僕が教えてあげるよ……その前に、こう言うんだ。『わたくしのいやらしい処女騎士オッパイで、パイズリご奉仕いたしますわ』だ」

観客たちが下卑た笑みを浮かべる様子から、クリスタが思う。

（……よくわかりませんが……酷く淫らな台詞を命じられている気がしますわ）

「言うんだ、薔薇の白騎士。浄化を受け入れるのであれば、僕の指示に従わなければならない。それとも、罪を清めたいと言う言葉は嘘かい？」

腰を振って勃起を揺らし、血管の浮く熱い側面で横乳を何度も叩きつつ、王が迫る。

「わ、わかりましたわ……んっ……わたくしのいやらしい処女騎士オッパイで、パイズリご奉仕いたしますわ……」

「そんな棒読みじゃダメだ。君は浄化してもらうんだよ？　嬉しそうに、笑顔を浮かべて言うべきだろう？」

子供腰を前後に振り、勃起ペニスの亀頭の先で乳首ごと乳輪を刺してくる。

「申し訳ございません……わ、わたくしのいやらしい処女騎士オッパイで、パイズリご奉仕いたしますわ♪」
典雅な女騎士が、目の前の巨根に向かって、花が咲いたような笑顔を向ける。
ビクンッ！　ビクンッ！
（なっ……王のペニスが……すごく揺れていますわ……）
「まだぎこちないけれど、君のその凛とした声で言われると、すごく興奮するね」
外見通りの子供子供した小さな手が、女騎士の両方の手の甲を掴む。
上から操りながら、乳房の外側を握らせ、左右に目一杯開かせた。
全面が汗で潤う胸板が現れると巨根をねじ込み、裏筋とピタッと密着させる。
「何をなさいますの⁉」
抗議している間に王は乳房を閉ざした。勃起ペニスが処女騎士の豊胸で包まれる。
「ふふ、出ているのは亀頭の部分だけか。僕の長くて太いものをここまで包めるなんて相当な爆乳だよ。騎士のくせに、なんていやらしいものを持っているんだい？　さぁ、このまま外側を持って、そのいやらしい騎士オッパイの肉でチンポを扱くんだ」
「うぅっ……わ、わかりましたわ……んっ」
侮辱されても逆らえないクリスタは、おずおずと乳房を動かし始めた。
左右を互い違いに擦り上げ、中のペニスを刺激する。
（熱いですわ……ペニスの燃えるような熱が胸の芯まで伝わってくる……）

潔癖な処女騎士の豊胸に、下劣王の性器の感触が染みてくる。
(黒ずんだ薄皮は柔らかいのに、すぐ裏側は鉄みたいに硬くて……胸の肌で上に下に擦ると、ビクッ、ビクッって震えて……振動が胸の奥まで届きますわ……んっ……んん)
ふと、先ほど見てしまったペニスの全貌が脳裏に浮かぶ。
一掴みにできない長さと太さ。皮の剥けた亀頭のサイズは、形のよく似たイチゴなどよりもずっと大きい。太い血管が何本も浮かび、全体的に黒ずんでいて、先端も黒曜石のように黒光りしていた。人間の身体の一部とはとても思えないグロテスクさだ。
(それがわたくしの……誰にも触れさせたことのないわたくしの胸の中に)
トクン……トクン……トクン……トクン……。
意識すればするほど、心臓が妖しく拍動する。
(この胸の高鳴りはどういうわけですの? はあ……はあ……相手は、それらしい建前をつけて女を玩具にする卑劣な男性ですのに……不快感がぼやけていきますわ)
勃起ペニスと擦れあう乳肉が、ゆっくり甘く痺れてくる。
(こんな感覚初めてですわ……)
女騎士の半生で感じたことのない種類の微快感に、クリスタは戸惑う。
「挟んでふしだらに興奮しているようだね。オッパイの火照りがチンポに伝わってくるよ」
「なっ!? わ、わたくしは……!」
身体の反応を見透かされた処女騎士が、うわずった声を出す。

「今、僕らは限りなく密着しているんだ。とぼけても無駄だよ」
胸の中でペニスを小刻みに震わせながら、王は優越感に満ちた笑みを浮かべる。
「それに、恥ずかしがることもないよ。君はとても健康的な女だからね。僕の王チンポをオッパイで挟めば、健やかな身体が反応してしまうのは当然だ。処女であろうともね」
清らかな処女騎士にパイズリされる肉棒が、震えと脈動を大きくしていく。
「チンポをぎゅうぎゅう押しながら、汗ばんだ肌が吸いついて……皮が引っ張られると敏感な肉の部分がくすぐられる風に気持ちいい……この感じ、すごく素敵だよ」
若くて健康すぎる処女騎士の肉果実が、類い希な巨根を扱き続ける。
シュッ……ムニュシュッ……シュッ……ムニュシュッ……。
「ふぅ、ふぅ……ああ、チンポが焼けてるみたいに熱くて、芯まで気持ちいいね……こんなオッパイが死蔵されてるなんて、勿体ないにも程がある」
顔を綻ばせるノクシウスが手を挙げた。
離れていたブルネットの剣闘娼婦が、透明粘液が入った小瓶を持ってくる。
「薔薇の白騎士、オッパイを開いて。中のチンポを一旦出すんだ」
クリスタは従う。女騎士の汗を纏った勃起が現れ、湯のような熱気と牡臭を放つ。
トロォォォォォォォォォォォォォ……ビチョォォォォォォ。
剣闘娼婦が、巨根の直上から小瓶の粘液を垂らした。
肉棒はみるみる濡れていき、根本までぐっしょりになる。

（このペニスの姿……見ているだけでドキドキしますわ……どういう液体ですの？）
凶器と言いたくなるほど逞しい剛直の濡れ姿に、妖しい興奮を憶える処女騎士。
「まぶしたのは、ローションという人工粘液だよ。ほら、オッパイを閉じて。また僕のチンポを包むんだ」
ノクシウスがペニスを突きつける。
胸板に刺さる直前で止められたクリスタが、緊張した赤ら顔で喉を鳴らす。
（これを……挟みますの？）
粘液塗れで妖しい光沢を放つ巨根を胸で包む――。
（淫らすぎますわ……！）
想像したクリスタの鼓動が早くなる。
（はあ、はあ……わたくしと王は夫婦ではないのに……わたくしは処女の騎士ですのに……こんな子作りにも必要のない……快楽を追求するためだけの行為をするなど）
これからすることを考えると、さらに心臓が拍動する。
（た、退廃的ですわ……い、いやらしすぎますわ……！）
僅かに呼吸を乱しながら逡巡していると、ノクシウスが冷たい小声で囁いた、
「やらなければ、鋼の乙女を失格にして彼女にやらせるよ。様子を見るに、君たちは親しいようだね。友達に自分の嫌なことをやらせるのかい？　正正堂堂と自分を破った女戦士の勝利を踏みにじるのが、騎士のやることなのかな？」

悪辣に言ってくる。
（そ、それは……それだけはなりませんわ！　ティローネに迷惑をかけるわけには）
クリスタは意を決した。
胸板深くに勃起ペニスを受け入れ、乳房を閉じる。
むにゅり……ムニュジュブムニュジュブリリリッ……。
騎士には不必要に大きい、だがペニスには喜ばれる爆乳で包みきる。
（はああっ……はああっ……あああ、ぬ、ヌルヌルしますわ……熱くて硬くて太くて大きい王のペニスが……わたくしの胸の中で、ヌルヌルしていますわ……はあ、はあっ）
卑猥な感触だった。
騎士の人生の中では似たものすらない、生まれて初めての淫感触。
これが淫らと思うのは、快楽追求のためだけのふしだらな行為をしているというだけでなく、粘液塗れで引っかかりのない剛直の触感が心を甘く昂揚させるからだ。
（あぁ、胸が高鳴る……はあ、はあ、わたくし、興奮していますの？　ハア、ハア、女の大事な部分が……アソコがむずむず疼きますの……こんな感覚は初めてですわッ）
男性上位の風潮を好まず、ノクシウスのように理不尽な男性を嫌悪する女騎士は、最高級の男のシンボルを胸に埋めさせた姿で懊悩する。
「動くんだよ。そのいやらしい騎士オッパイで、僕のローションチンポを扱くんだ」
ノクシウスは邪悪に口角を吊り上げ、信じられないことを言ってきた。

「下半身のバネを使ってね。マイクロミニのスカートをひらひらさせて、オッパイに負けないくらいにムッチリした黒タイツのお尻をバウンドさせて、上半身全体を上下に揺すりながら、心を込めてチンポを扱くんだよ」

（はあああああ……！）

聞いた瞬間、心臓が狂ったように拍動した。苦痛のない、甘さに満ちた鼓動だった。

ますます呼気を荒らげながら、女騎士はノクシウスを見詰める。

「そ、そんな、いやらしいこと……はあ、はあっ、騎士のわたくしには……ああ、で、でもやらないとティローネが……わ、わかりましたわ……はあ、ハァッ」

逆らえない女騎士は、王の淫らな指示に従う。

ヌチュッ、グチュッ……ヌチチッ、グチュッ。

「もっと早く。もっと締めて。こんなのじゃ、いつまでも終わらないよ」

突き放した声で、ノクシウスが言う。

ゾクゾクゾクゾクゾクゾクゥゥゥゥ〜〜〜〜〜〜〜!!!

ずっと年下の男の子にしか見えない王の傲慢で冷たい声が、心臓を痺れさせる。

妖しい寒気が背筋を上ってきて、うなじがサァッと粟立った。

「はあああっ、はああっ、も、申し訳ございません、ああ、はああ、はあああっ」

ニジュッ、ジュズッ、グジュジュッ、ニジュゥゥ！

（わ、わたくしは何をしていますの……？　はあっ……はあっ……）

七万人の観衆の前であられもなく裸の騎士爆乳を晒し。
いやらしい粘液でグチョ濡れの、逞しいペニスを取り込んで。
金髪の巻き髪を靡かせ、黒タイツの巨尻を弾ませ、丹念に性交奉仕している。
(騎士ですのに……あああ、処女ですのに、淫らな快楽追求行為に手を染めて……なのにっ……はあー、はあーっ、あ、胸が、ああ、胸がときめいてしまいますわっ)
暴風めいた呼吸をする女騎士の胸の中で、勃起ペニスが何度も根本から震える。
(ハァァッ、はああーーっ、胸の中で、ペニスが暴れてますの……ああ、わたくしの胸で、根本から先端までを扱かれて、はあっ、ハァッ、淫らに興奮していますわッ!)
張りつめた亀頭が、胸の中に隠れたり出てきたりする光景が身体を熱くさせる。
「ふぅ、はあ……薔薇の白騎士のオッパイマンコは最高だね。そろそろ出すよ。『薔薇の白騎士のオッパイマンコで、どびゅどびゅ精液排泄してくださいませ』と言うんだ」
薄く頬を紅潮させる王が傲然とした目つきで命じ、自身は腰を前後に振り出す。
ジュブゥッ! グリュッッ! グブジュリュッ! ブジュンンン!
巨根の芯まで熱と快感の固まりになっている肉棒を、荒々しく抜き差しする。
「ハァ、ハァッ、ああ、ば、薔薇の白騎士のオッパイマンコで、どびゅどびゅ精液排泄してくださいませっ!」
自身の芯の強さを孕ませた美声で、下劣な言葉を口走る。
(ああ、い、言ってしまった……きっと、最低なことを言わされていますのに……ああ

ッ、こんなに激しく、はあ、はあっ、ペニスで胸を貫かれては……はああ、冷たく命令されたら、逆らえませんわ……っ）

雄々しい巨根の存在感が、王の邪悪な威厳が、女騎士の反骨心を軋ませる。

ひれ伏したくなる気持ちにさせ、抵抗心を萎えさせる。

「くぅっ、ふぅぅッ、イクぞ、薔薇の白騎士っ……さぁ、言え、今度は『ティローネ、わたくしの爆乳マンコで、ノクシウス様が射精なさる瞬間を見て』だ」

（ハァァッ、ハァァッ、そこまで変態的なことも言わされますのォ……！）

浄化などおためごかしに過ぎない。

最初にノクシウスが言った通り、これはただの敗北陵辱。

好きでもないどころか、最悪だと思う王の性欲処理をさせられているに過ぎない。

そんな下劣な性行為を、積極的に見てと言うだなんて――。

（わたくしは貶められて、ハーッ、ハーッ、騎士の誇りを踏みにじられていますわっ）

理解している。

頭がぼうっと熱くなっているけれど、何とかわかる。

怒るべき場面なのに、はねのけるべき時だというのに――。

ゾクゾクゾクゾクゾクゾクゾクゾクゾク!!!

背筋が妖しく泡立つ。どうしようもなく興奮してしまう。

「ハァーーーーッ！　ハァーーーーッ！　ティローネぇ、わたくしの爆乳マンコで、ノク

シウス様が射精なさる瞬間を見てぇぇぇ！」
　惨めな命令に従い、退廃的な快感に浸りたくなってしまう。
「ああっ、クリスタの爆乳マンコでどびゅどびゅ射精なさってっ、ハアッ、ハアッ、ティローネ！　処女騎士オッパイマンコで精液排泄していただく瞬間をご覧になってぇ……ハアアッ、ハアアアッ！」
　ノクシウスの腰振りにあわせて上半身を弾ませ、クリスタは王の巨根を扱く。
　パンパンぶつかり、ブチュブチュと卑猥な音を立てるペニスの麓と下乳の衝突面は、ローションと先走り汁でグチョ濡れになり、無数の細い粘糸が伸び縮みしている。
　先ほど激闘を繰り広げた女騎士の凛々しい美顔は色っぽく赤面し、細かい汗の粒を浮かべ、酔ったようなぼんやりした目つきをしている。
　ビクッ！　ビクンビクンッ！　ビクビク、ビクククッ！
　王の勃起ペニスが何度も引きつり、一回り大きくなっていく。
「はあ、はあ、いいぞ、いい牝顔だ……くぅぅ、その顔を見ているだけで、射精しそうだ……ああ、勿論、このオッパイマンコも極上だぞ、はあ、はあ、それでいて、恐ろしく強い騎士という……ふふふ、ああ、射精し甲斐のある女騎士だ……ほら言え、『処女クリスタの爆乳オッパイマンコで、ナマ巨根チンポの王様精液を排泄なさって』だ」
「あああ、はいっ……ああ、言わせていただきますわ……ごくッ……ハァーッ、ハァーッ、処女クリスタの爆乳オッパイマンコで、ナマ巨根チンポの王様精液を排泄なさってぇ！」

「……触手たちが言うことを聞いた……まさか、ショタ王のコピーの力は」
スズネが考察しようとした時、憎らしげな声がした。
「生意気だよ、君……！」
忌々しそうに顔をしかめた王だった。パレオめいたスズネの腰巻きを剥ぎ取ると、露わになった褌も呆気なく破り捨てる。
「君が守ろうとした強き大地母の【能力】で股間が丸出しになった気分はどうだい？」
邪悪に口角を吊り上げながら、幼げな秘唇をじっくり見てくる。
陰毛一本ないツルツルの肉の土手には余分な肉がなく、まるで産まれて間もない赤ん坊の秘部のよう。陰裂は毛筋の細さでぴったり閉じている。
――おお、すげぇ！　見た目通りのロリマンコだぞ！――
観客の視線が、剥き出しの初々しい秘部に突き刺さる。
――犯せ！　犯せ！　犯せ！　犯せ！――
支持する王に刃向かった愚か者への怒りと、陵辱を求める獰猛な視線が降る。
「うぅ……下衆どもの目……強烈すぎる」
スズネの秘唇が、何人もの男女に愛撫されている風にズクズク疼く。
【能力】を使うには集中が必要だ。視姦で心乱れては、触手どもを操れないだろ？」
ノクシウスの顔と声が、平素の自信に満ちた顔に戻った。
「最高に屈辱的に犯してあげるよ」

王の瞳が金色に光る。静止していた触手たちが動き出す。
蛇のように太い一匹が、本当の主人であり母でもあるくノ一の両手首を一つに纏めて縛り上げる。別の肉紐は、くノ一の証のマントを剥ぎ取って、そのまま首に緩く巻きつく。また別のは、ところどころ破れて生肌が露出する長靴下の太ももに絡み、M字開脚の体勢にして持ち上げる。
「自分の触手と【能力】で縛られるっていうのはさ、すごく悔しいよね？」
ノクシウスはくノ一の太ももに絡む肉紐を移動させ、直立する自分の股間に幼い秘部が来るよう調整した。縛られた両腕の間に頭をくぐらし、前半身同士も近づける。
「入れるよ……君のロリマンコに、大嫌いな僕のチンポを根本までね」
「……この下衆！　あたしにもウェレクンダにも変なことむぐぅぅぅ！」
罵るスズネの唇を強引に奪って黙らせると、王は流し目を送る。
相手はポーションを運んできた剣闘娼婦だった。彼女は持ってきた小瓶の蓋を開け、中の透明ローションを王の巨根にたっぷりかける。
（放してよ……このバカショタ！）
逃れるために激しく手足を動かすスズネだが、触手で拘束された不自由な体勢では甲斐もない。
唇を奪うノクシウスは、余裕綽々で舌を入れ、口内を舐め回す。か細い両手でくノ一の背中と腰を我が物顔で抱きしめ、前半身同士を密着させる。狙い撃ちする風なタイミング

で、重なる二人の股間の下から這い蹲る剣闘娼婦の手が伸びてきて、王の肉棒の先を秘唇にあてがった。
グチュゥゥゥゥ……！
ディープキスをし、互いの火照り気味の肌を重ねあわせながら、王は挿入を始める。
透明な粘液で全身を濡らした勃起巨根が、縦筋の秘裂に浅くめり込む。
（すごく熱くて硬い……このバカ、あたしを犯したくてウズウズしてる）
秘部まで犯されると思った瞬間、スズネはぞっとした。
（こんな最低なバカとなんて嫌っ……解けて触手……あたしは逃げたい！）
くノ一の任務で男と交わったり、そのための訓練をしてきた身だが、心から嫌悪する卑劣な男と一つになるなど本当に嫌だった。
「んぷはぁ……無駄無駄。小さくて華奢な、こうして抱いているだけで折れてしまいそうな身体では、強き大地母の怪力を使う僕に勝てるものか……ほら、もっと入るよ」
接吻を解いて金色の瞳を光らせると、ノクシウスはスズネをさらに抱き寄せる。
グチュッ……ジュププププププ……。
縦筋よりも大きな亀頭の先が、押し入ってくる。
「うぅっ……は、入ってくる……」
肉唇が巻き込まれる。エラの張ったカリ首が、グイグイ粘膜を擦り上げていく。ローションのぬめりがよく利いていた。使い込まれた牡肉の固まりを埋め込まれても、苦しさよ

りも仄甘い切なさが胸にこみ上げる。
「はあ……はあ……いや……こんな奴と繋がりたくない」
肉壺に起こる、身を委ねたくなる甘い痺れと戦いながら腰をくねらせる。
しかし、肉棒は杭のように嵌まり込んで少しも抜けない。とても逃げられなかった。
「ふぅぅ……狭くて気持ちいいよ……そら、奥まで僕のもので満ちた」
亀頭の先と子宮口を密着させたノクシウスが、さらに腰を突き上げ、子宮を揺らす。
「あうぅぅぅっっ……！　だめ……嫌なのに……感じて……はぁ、はぁ」
性器同士を合体させた時特有の蜜電気が迸り、媚肉の体温が一気に上がる。
肉棒に塗りたくられた人工粘液と滲みたての愛液が溢れ、重なる股間が濡れそぼつ。
――へへ、ノクシウス様のチンポがずっぽりだ。ざまぁ見ろ！――
――血が出てない……あんな子供が処女じゃないのか⁉――
観客たちが野次を飛ばす。
「強き大地母に見た目通りの歳じゃないと言っていたけど、あれは嘘みたいだね。濡れやすくはあるけれど、狭くてヒダが低くて、小さな子と変わらない肉壺じゃないか。鍛えたくノ一だけに、締めつけは段違いだけれども」
勃起ペニスを奥まで挿入した状態で、ノクシウスはスズネの顔をじっと見る。
「あたしは嘘つきじゃない、はあ……はああ、忍の秘薬で、性器の若さも保っているだけだよ、このバカ王っ……はあっ、はあっ」

小さなくノ一は息を荒らげながら罵るが、王はからかう風に笑った。
「顔が赤くなってきてるよ。汗もかいてる。それは暑さのせいじゃない。息づかいがふしだらだからね。感じているのだろう？　いくら性器の若さを保っていても、初体験の堅物女騎士だってよがらせる僕の巨根の威力が及ばないわけがないもの」
自信たっぷりにノクシウスが笑う。悔しいが言う通りだ。
性交の絡む任務と鍛錬を積んできた身体は、汚い男の肉棒に反応していた。
くすぐる風に刺激し、圧迫快楽を与え、牡肉全部に発情した媚肉の熱を伝えている。
「そろそろいこうか。神出鬼没の影のロリマンコ、たっぷり楽しませてもらうよ」
ずるるるる……ジュッププ……ずるるるる……ジュブブゥゥゥ……。
王はのろく腰を使い、カリ首と肉棹を往復させる。
蜜ヒダが一片残らず、上へ下へと擦り上げられる。
（うああっ……膣の中が……はあ、はあ、快感で満たされる……っ）
肉棒が抜き差しする度に、牡肉塊と触れあう膣ヒダに甘美な痺れが走る。
内側からペニスの形に押される圧迫も心地よく、細い腰が粘く震えた。
掻き出されるローションに、愛液が混じる割合が大きくなっていく。
「ふぅぅ……これはいいロリマンコだ。是非とも配下に欲しい名器だね」
王は口元を綻ばせ、自分の巨根に犯される快楽を染み込ませる風に執拗に腰を振る。
じゅぶるるるる……ブジュゥゥゥッ……ずるるるる……ブジュルルルゥ……。

（はあっ……はあっ、い、いけない……このままじゃ……絶頂させられる）
太すぎる肉棒に内部を抉られる愉悦は、大きくなる一方だった。
全身が気持ちのいい浮遊感に包まれて、鼻先で繰り返し火花が散る。
憎い相手の背中に回っている手には力が籠もり、思わず彼を抱きしめかけた。
（あたしも……クリスタみたいに、こいつの奴隷になるの……？）
自分と同じようにノクシウスを嫌っていた女騎士が、巧妙で悪辣な手管で征服された時の光景が脳裏に浮かぶ。
（こんな奴の奴隷なんて嫌っ……あたしには、お金を稼いで故郷を復興させる夢がある……でも、このままじゃ果たせないかも）
快感で意識が飛びそうなくノ一は、歯を食いしばる。
（あたしは負けるかもしれない……でも……せめて一矢報いる……っ）
犯されながら首を巡らせると、背後のウェレクンダが泣きそうな顔をしていた。
本戦出場選手を集めた晩餐会の時、娘のティローネがノクシウスの映像に斬りかかろうとしていた様子を脳裏に浮かべる。自分には無関係だったので構わなかったが、気付いていた。同じくわかっていた節のある女騎士クリスタが放置した理由もそうだろう。
女剣士の母のウェレクンダが、賞金はいらないと断言している。二人が名誉を欲しそうにしている様子もない。ならばどうして、こんな危険な大会に出場したのか。
ウェレクンダ母娘は、このノクシウスを殺すチャンスを得るために、大会優勝を目指し

ているのではないか？　悪王は人気者だが、陰に日向に悪質なことをしている。剣闘娼婦に堕ちる前の女大臣のように恨む者はいるのだ。母娘もそうではないのか？
「ふふ、膣肉がすごくビクビクしてるよ、はぁ……はぁ。もう絶頂するんだね？　君が殺そうとしたこの僕が、思いきり絶頂させてあげるよ。君も僕の剣闘娼婦になるといい。仕込み中のクリスタと一緒に、僕に都合のいい愛奴隷に調教してあげる」
　ノクシウスは、とどめとばかりに腰を叩きつけてくる。体重を乗せて股間の肉全体をぶつけ、パンパンと打擲音を響かせる。重く硬い肉棒の先で、子宮口を突き上げてくる。
「んんっ、あっく……はああ、はあぁ、あ、こ、コピーのうりょくは、みるだけじゃふじゅうぶん、あっ、あっ……ッ」
　身体の芯から甘美に揺すぶられる中、スズネは必死に言葉を紡ぐ。
　ノクシウスが訝しげな顔をした。抜き差しの勢いが微かに鈍る。
「こうしてはだを重ねるのも、たぶん、ひつよう、あふぅっ、んくぅう、あっあ、はあっ、はあぁっ、こぴーも、れっか……本来の使い手よりも、すうだんおとるぅン」
　消え入りそうな正気にすがり、犯されながら思考を巡らせ、舌足らずに伝える。
　ノクシウスの顔が、恐怖した風に強張った。ウェレクンダは息を呑んでいる。
「ちからしょうぶなら、こぴーされても、れっか版だから、あぅう、しょうめん勝負なら、ぜったい負けない……まけないで……」
「黙れっ！」

小さな王が怒気を露わにした。瞳の金色が目映ゆく輝く。
側の触手が動き出し、リングにできたローションと愛液の水たまりで転がる。滴るほど総身に粘液をつけると、スズネの足を這い、お尻に上っていく。
「あぐぁっっっあ〜〜〜〜〜ンンンンン！」
触手は肛門の皺を伸ばして直腸に侵入し、自分の形に型どりしていく。
「いつまでもみっともなくあがくな、僕に逆らうな、この負け牝くノ一め！」
直腸を征服した触手が、ノクシウスが念じた通りに、全身をブルブル震わせる。
「はぁぅっ……んんあぁぁ〜〜〜〜お尻の中が気持ちよく——ンンンンッッ……！」
くノ一の鍛錬で、肛門性交もできるほど開発されていた粘膜が、瞬く間に妖しい痺れで満たされた。M字開脚で宙に浮くスズネの十本の足指が、堪らなそうに丸まる。
「生ぬるかったよ。君は、自分の触手と【能力】を利用されながら犯される惨めな姿を晒すべきメス豚だ……いや、これじゃ足りない」
ノクシウスは、スズネの後ろの女に命令する。
「強き大地母。僕の尻穴を舐めろ。中まで舌を入れて、前立腺に奉仕するんだ」
「や、やめて、あぁンン、その人は関係ないっ、あ、あたしだけを狙えばいいッ」
「ダメだ。君が憎からず思う彼女にも辛酸を舐めさせ、君をとことん苦しめながらフィニッシュしないことには、腹の虫が治まらないっ……うぉッ……うぉおお！」
ウェレクンダが王の後ろに膝立ちになり、肛門を舐め始めた。

「れろっ、じゅっぷじゅっぷ……ひもちいいれすか、のくしうふさまぁ……はふ、あふ、うぇれくんらの舌づかいは、かいかんれすか」
子を持つ女は、どこかで娘が見ているはずの状況で、子供尻を鷲掴みにしていた。ふくよかで柔らかい両の尻タブに指抜きグローブの十指を食い込ませ、短めの臀裂に細い頬をぐいぐい押しつけ、直腸に深々と舌を埋め込む。
「はあ、はあ、いいぞ、ウェレクンダ……前立腺をもっと刺激するんだ、オオッ！」
「わはりまひた……んっ、んんっ……」
舌全体で直腸粘膜を撫でる、力を込めた先端で、敏感スポットを強めに擦る。
屈辱奉仕を行うウェレクンダは赤面し、悩ましげに眉根を寄せながら繰り返す。
「やめひゃせろぉ、んああっ……ハアッ、ハアッ、きたならひいことをしゃせるな！」
ろれつの回らない声を張り上げながら、スズネが抗議する。
「ハハハ！　君が守りたかった女が硬くさせているチンポと自分の触手で犯されて感じているくせに、まだ無駄な抵抗を続けるの？　僕に勝てないとわからないのかい？」
ノクシウスは渾身の力で、何度も股間を叩きつけ、粘液を飛び散らせる。
（ウェレクンダを助けたかったのに……逆に苦しめてる……悔しい……あぅうっ、悔しいのに、憎い奴に犯されて気持ちいいのも、悔しいッ！　んあぁッッ……！）
勢いよく子宮口を突き上げられて、目の前で無数の火花が散る。
全身から体重の感覚が掻き消え、まるで身も心も溶けてしまったよう。

辛いのに気持ちよくて、嫌なのに感じてしまう自分に心をますます乱すくノ一。
「触手がお尻をみっちり埋めているから、勃起ペニスにかかる圧迫感はすこぶるいいよ！ ああっ、キツキツのロリマンコが、触手に押されてさらにキツイ！ ふうっ、くうっ、実に抜き差しのし甲斐のある、幼女マンコだ！」
反対に、ノクシウスは上機嫌だった。汗で光る紅潮顔で嬉しそうに腰を振る。
（達したら負けなのに……クリスタみたいに、こんな男の奴隷になるのに……快感が止まらない……ああ、だめ……耐えられない！）
「はあっ、んぐ……あ、あぁぁぁッ、まえもうしろもっ、ごりゅごりゅこしゅれて……ら、らめぇっ！ もう、おかしゅなっ、あたしを、しぇんのうするにゃぁぁ！」
快感で脱力しているせいで、身をよじることもできない。
悦楽で集中力が乱れているから、我が子同然の触手の裏切りを正せない。
こんなに心が無防備になっているのでは、洗脳を跳ね返すなど絶望的だ。
――ギャハハハ！ なんてみっともないんだ！ あんなに強い女がよ！――
――イクのを嫌がる幼女が、王様に中出し絶頂させられる顔を見たいですわ！――
「ふぅっ……はあぁっ、観客もああ言っている……そろそろキめるよ……！」
腰を振りたくる王が、くノ一の真っ赤な発情顔をじっと見詰める。
「僕に射精されて堕ちるがいい……君にも、剣闘娼婦の刻印をつけてあげるよ！」
金色の双眸を太陽みたいに光らせると、肉棒が抜けかけるまで腰を引き、止まった。

一拍後、鷲掴みにする尻タブを引き寄せながら、とどめを刺す風に腰をぶつける。
ローションと愛液が粘液音を響かせ飛び散った。股間全体にも、一片残らず擦り上げられた膣ヒダにも、大きく揺すぶられた子宮にも、甘美すぎる電気が迸る。
「あひぃぃイイ!!!」
スズネは思わず、心から嫌悪する男に抱きついていた。
前半身を押しつけ、自分から密着を深くする。
「オオオッ、出すよ神出鬼没の影！　膣内射精されて絶頂する顔を僕に見せるんだ！」
叫んだノクシウスは、彼女の顔が見えるまで身体を引き剥がす。
伸びてきた触手が、幼い乳首に巻きつき、締め上げた。
犯される快感で勃起していた、赤みの強いピンク色の尖りに快美電流が走る。
平坦だった乳輪も、爪の厚さほどの段差を作っていた。
乳首締めする触手が擦れる度に、焼けつく風な快感が弾け、幼げな胸元がくねる。
スズネはすすり泣くように長く喘ぐ。王巨根を包む蜜肉壺が熱烈に締まった。
肉棒の隅々が牡快楽で満ちた次の瞬間、射精衝動が弾け、吐精が始まる。
「しゃせいするなバカおうっ、しぇんのうはイヤ――あぁああアァ〜〜〜!!!」
ドビュゥゥゥ！　ドグンンンッ！　ドグッドグッドビュルル！
（い、いやぁぁぁ……中で暴れながら、あああっ、肉棒が射精してるっ……あたしの中が、卑劣バカ王の汚い精液で満たされてるッ……こんなのいやァッ！）

娘を辱めるのも厭わない牝奴隷と化した母は、恥ずかしそうに頷いた。
「はい……ティローネの父親と一緒になった頃までとそっくりです」
「へぇ？　今はすごくスケベな肉厚マンコだけど、やっぱりこんな時期があったんだ」
王は、粘つく視線でティローネの秘部を見詰める。
「けどさ、こんな処女マンコでも、既に母親譲りの淫乱さを出しているよね」
顎を撫でながら侮辱するノクシウスを、ティローネが睨む。
「どういうこと！　私だけじゃなく、ママまで悪く言うなんて許さないわよ！」
ノクシウスは、髪の毛ほどの割れ目を指さした。
「だってさ、濡れてるよ。甘酸っぱいスケベ汁がプンプン匂ってくる」
「……ッッッ⁉」
慌てて自分の秘所を見て、ティローネは絶句した。
揶揄する口調で、ノクシウスが畳みかけてくる。
「処女マンコに不似合いなグチョ濡れぶりじゃない。これって、パイズリしていた時にスケベ汁を出していたってことだよね。母親と一緒に胸でチンポをズリズリしてここまで発情するなんて、信じられないなぁ」
「ああっ……あああああッ、こ、これは違うっ、違うのよ……ッッッ！」
ティローネは目を白黒させながら、ガニ股の足を閉じようとする。
「恥ずかしがることはないわティローネ。ノクシウス様の巨根オチンポ様にパイズリして

昂ってしまうのは、仕方のないことなのよ。こんなに立派なものにご奉仕できるなんて、女の幸せですもの」

だが、長靴下とロングブーツの母の足に力が籠もり、閉じさせてくれない。

胸を軽く掴む母の両手が邪魔をして、自分の両手で隠すこともできない。

――マジかよ。セックスに興味なさそうな顔して、パイズリで感じてたなんて――

――ああいう娘ほど、濃厚な情欲を秘めているのよね。母親も淫乱みたいだし――

嘲笑めいた歓声が、そこかしこから聞こえてくる。

「見るなぁっ！　私もママも淫乱なんかじゃないっ！　ママの悪口を言わないで！」

処女乙女の身体が羞恥で熱くなり、母を侮蔑されるショックで心が乱れる。

ぐちゅり……。

「なっ⁉　何をしているのよっ！」

野次に気を取られていた隙に、ノクシウスが巨根の穂先を押しつけてきた。

全面的に濡れている細い割れ目からはみ出すくらいに大きい牡肉塊が、密着している。

「これから君の処女をもらうのさ。クリスタにした風に、たっぷりよがらせてやるよ」

ノクシウスが冷たく言い放つと、ウェレクンダが嬌声を上げた。

「母親として嬉しいですわノクシウス様！　愛する娘の処女喪失の現場に立ち会えるなんて……しかもお相手は、あなた様の巨根オチンポ様……羨ましいわぁ」

仰向けで娘を押さえつけている母が、興奮で息を荒らげる。

「いやよっ、こんな初体験なんて、絶対にいやぁッ！」
七万人の大観衆の見せ物となり――。
実の母親が喜んで破瓜を手伝い――。
大好きな父の仇であり、大切な人たちの人生を狂わせた男が――。
太くて、長くて、黒ずんでいて、先端などは照り光っていて――。
大事な皆の貞操を踏みにじり、汚くて臭い汁をたっぷり放ったペニスなのに――。
「はあっ……はあっ、く、来るなぁっ、んぐぅっ、来るな――ァアアアア～～～！」
正常位で犯されてしまう。
ジュッブゥゥ、ブヅンッッッッッ!!!　ブジュゥゥゥゥゥゥゥ～～～～!!!
巨根は大陰唇と小陰唇を内側に巻き込みながら処女膜を破り、一気に突き進む。
自分も触れたことのない膣の内部をめくり上げていく。
「ほぅら、僕の王様チンポが奥まで届いたッ！」
自分では触れられない一番奥を、重く強く突き上げ、ぴったり密着し、止まる。
「い、いやぁ、ハァッ、ハァッ、こんな奴の、ペニスが……ああっ、私の中にミッチリ埋まって、ハァーーッ、ハァーーーッ！」
隙間なく触れあい、燃えている風な熱感を伝えてくる。
肉とは思えない――鉄じみた硬度をなすりつけてくる。
気持ちの悪い脈動振動を染み込ませてくる。

（ハァーッ！　ハァーッ！　私今っ、こいつと一つになってる……ハァッ、ハァッ、性器で……女の子の一番大切な部分に押し入られて、繋がってるわ……！）

どうしようもない合体感を、味わわされている。

（ち、違うっ……繋がってるなんて生やさしいものじゃない……アア、う、うぅぅ、ハァッ、ハァッ……ひ、広がってる……私のアソコ……こいつの形にされてる……！）

ミシミシという肉の拡張音が聞こえてきそうだった。

膣肉の一片一片が押され、広げられ、型どりされているのが嫌と言うほどわかる。

「えっぐっ……ああ、い、痛いっ……痛くて、気持ち悪いっ……！」

目頭が熱くなり、大きな涙の滴が溢れる。

身を裂かれたような破瓜の痛苦が、今更ながらにティローネを苛む。

殺したい男に秘所を征服されてしまった苦しみが、心に伸しかかる。

「……ふぅん、これが君の【能力】か」

瞳を金色にしたノクシウスが、嗜虐的に口角を吊り上げている。

「憎しみと怨嗟と苦痛と汚辱感でいっぱいの君の思考と感情が心に流れてくるよ」

「ぐすんっ……んっ……え……？　私の【能力】……？」

「君の前でクリスタにした風に、コピーした君の力を今使ってる……発動に気がつかなかった場合も、そうとわかった後に観察した行動を思い出せばコピーできるんだよ」

「やだっ……こんな奴に……はぁ、はぁ……力をコピーされたなんて気持ち悪いっ」

泣きながら顔をしかめるティローネに、ノクシウスは薄ら笑いを浮かべる。
「楽しみだよ。この悪感情の固まりが、淫らな桃色に染まるのが……ウェレクンダ」
「はい、ノクシウス様」
「娘をラクにしてあげて」
嬉しそうにしているがどこか表情が曇っていた母の顔が、日の光みたいに輝いた。
「あぁ、お慈悲に感謝いたします、ノクシウス様……！　はあ……はあ……ティローネ。私の大切なティローネ……泣かないで、ママが痛みも苦しみも癒やしてあげるわ」
目の下を赤らめ、慈しむ声で囁くと、ティローネの両頬に手を添えた。
「ちゅっ……ちゅぅぅぅ……チュッ、チュッ……はむっ、んふぅ、はあ、ティローネ」
自分の方へ向かせると、娘の乙女唇に、母の熟女唇を繰り返し重ねる。
「えっ……そんな、んむっ、だめママ、親子でキスなんて……あはンンっ、んふぅ、私、これがファーストキスなのよ……っ」
「んぷぅっ……はぁ嬉しぃぃ……愛するティローネの初めての相手になれたなんて。たくさん気持ちよくしてあげるわ、大好きよティローネ。んちゅ、チュゥ……はぁむっ」
唇を軽く触れあわせ、押しつけて密着し、上唇と下唇を順番にはむ。
息継ぎで漏れる吐息は熱く湿っていて、娘の顔全体を薄く濡らす。
「はああっ、ああむっ……んんっ……はあ、はあ、ま、ママぁ……ああっ」
ティローネが、微かに乱れた息をこぼす。

母に唇を押しつけられ、はまれると、ゆったりした甘美が口元いっぱいに広がる。
破瓜の痛みと、忌まわしい男と一つになっている痛苦が、徐々に溶けていく。
「ぁあん……ああ、い、いけないわママ、んむっ、はむんぅぅ、ひ、人が、はあっ……はあっ……大勢が見てるのよ……んむぅぅんん」
「構わないわティローネ、チュッ、チュムッ……んふぅ……愛するあなたを気持ちよくさせられるのなら、何人に見られてもママは恥ずかしくないし、嫌じゃないの……チュゥレルゥゥゥ……」
力の抜けた唇の間から舌を長く入れ、娘の舌を撫で回す。
「はあ、んふう、むしろ、母娘でキスしているのを見せたいわ……ああ、はぁンン……相姦ベロチューを見せていると思うと、あはぁン、ママ、すごく興奮するの、ちゅっ、れろれろれろ……ジュルルル！」
娘の舌に舌を絡ませ、娘の口中を舐め回し、美味しそうに唾液を啜る。
（ああ……相手は大好きなママなのに、こんなの常識外れの変態的なことなのに……はあ、はあ、優しくされると口の中も舌も痺れるぅ……）
恐らくは、父ともキスしたであろう唇と舌で愛撫される。
そう意識すると、背筋に退廃的な寒気が走る。
「ティローネ、ああ、ティローネ……息が荒いわよ？　気持ちいいのね？　もっとよくしてあげる……愛するティローネ……ママがもっと、女の快感を教えてあげるわ」

顔から離した手で、娘の双乳をやんわり揉みしだく。
指抜きグローブの細くて温かい手指が、娘の乳肉に谷間を作っては跳ね返される。
パイズリ時のローションで全体的に照り光る若い肉果が、奔放に形を変えていく。
「はむっ、チュッ、れろれろれろ……んフゥ、ああ、素敵だわ……はあ、はあ……絹のようになめらかな肌……押せば気持ちのいい反発力を味わわせてくれて、離すとすぐに元に戻るパツンパツンオッパイ……手からこぼれる爆乳なのに、全然垂れない……これが若さなのね、羨ましいっ……ママの若い時も、こんなによくなかったわよ」
徐々に力を込めて揉み、強めに掴んで捏ね回し、パッと離して思いきり握る。
そうすれば若い魅力を奪えるとでも思っているかのように、ねちっこく触れてくる。
「ハッ、ハァッ、んグむっ、んんっ、む、むねが、感じちゃう、は、ンフゥッ……！」
胸で肉棒を扱いていた時の甘すぎる痺れが、両方の乳房に広がる。
ずっと浸っていたいような、避けるべきでもあるような、不安を伴う快美。
復讐のための鍛錬に費やしてきた半生の中では想像すらしたことのない乳悦。
それを、実の母親に教え込まれる背徳感。
「はっ、はあ、チュッ、チュッ……れろれろれろれろ、ジュルルルッ！　ぷはぁン」
母は娘の胸を可愛がりながらキスを降らし、舌を絡ませ、混ぜあわせた唾液を吸う。
（あああっ、ママとのキスも気持ちいいっ……口とオッパイ気持ちいいぃっ）
近親の禁忌を足蹴にしながら――。

自分を儲けた愛の営みでも父に触れたはずの手で胸を愛撫されて――。
失って仇を討ちたいと思う父の口にもしたであろうキスをされて――。
若さへの嫉妬を微かに含む愛情たっぷりの性行為を味わわされて――。
「はふぁ、あっ、あっ、んんっ、んむちゅ、ん、あふぅ、ンフーッ、んふぅンン」
ノクシウスに弄ばれる屈辱も、王への憎しみも、蕩けていく。
「わかる……わかるよ鋼の乙女。君の心が歓喜しているのが君の【能力】でわかる。でもまぁ、この有様を見れば誰でもわかるか」
母のムッチリした太ももでガニ股に押さえられながら、根本まで巨根を咥え込む秘唇は、だらだら愛液を流している。
鍛え抜かれた太めの太ももと一緒に、処女の恥丘の肉が引きつっている。
「いくよ、鋼の乙女。君も僕のチンポで堕としてやる……！」
奥まで挿入しながら母娘姦を鑑賞していたノクシウスが、動き始める。
ぐりゅっ……ぐにゅる……ぐじゅぶっ……ぐりゅ……ぐりっ……にゅぐぐっ……。
体重を乗せた亀頭の尖りで子宮口を押しつつ、捏ねてくる。
「んっ、ふぅっ……いい気持ちだよ鋼の乙女。君の一番奥の肉は具合がいい」
右へ左へゆったり腰を回し、軽く重くと力加減を調整しながら抉ってくる。
「あッ、あッッ！　はああ、はぁあっグ、んんっ、ああぁ、あああアアアッッッ！」
復讐の処女剣士の子宮口に、ビリビリと快感電気が起こる。

（い、痛さも苦しさもなくなって、ハア、ハア、ママにキスされたり、オッパイを揉まれるよりも……ああ、そんなっ……気持ちいい……！）

鼻先で白い火花が何度も散る。

炙られている風に頭の中が熱くなる。

「はぁ、ふぅ……時間を経てチンポとマンコの隅々が馴染んでるし、実の母にたっぷり昂らされたからね……はあ、処女でも、一番奥はキくだろう？」

ずぶぶぶぶ……ジュブンッッッ！　ぐりゅりゅ、じゅぐりゅっ、にゅじゅっぷ、ぐりゅっぷ……ずぶぅぅぅ……ブジュゥゥンンン！　ぐりゅっ、ぐりゅっ、にゅじゅぷっ、ぐじゅっぷ……。

亀頭が抜けそうになるまで抜いては、僅かなタメの後に一気に貫く。

身体中の力を集中させたペニスの麓の一撃が、股間を揺すぶる。

最奥どころか子宮すらもじぃんと痺れさせると、すかさず捏ねくり回してくる。

「はぅぅぅ……あアアッンンンッッ！　はあっ、んふぁッ、ングぅぅ、あはァッッ、はぁンンン！　はあっ、はあっ……は、あぁあああっっ、あぅンンンッッッ！」

太ももふくらはぎも股間も――下半身の全部の汗ばみ肌が、粘っこく痙攣する。

（こんな奴にされてるのに……ああ、アア、あんな、大きくて、黒ずんでいて、気持ちの悪いペニスにされてるのに、ァアはぁッン！　か、快感が、止まらない……ッ！）

薄めの処女秘唇が愛液を垂れ流しているのが恥ずかしすぎた。

繰り返しぶつかってくる仇の下腹がべったり濡れて、無数の粘糸が股間で伸縮している光景が耳たぶまで熱くする。
「んチュッ、はむっ、じゅぷぷ、れろれろれろれろっ、ジュルルルルル〜〜〜〜〜！んぷぅっ、はぁん、ティローネ、感じているのね、はあ、はあ、ママは嬉しいわ」
モミュッ、モミモミ……モムニュッ、モミッ、モミッ、ブルブルッ、ブルルルルッ。
母は娘の胸を揉みしだき、根本から捏ね回し、芯まで揺すぶり、ねちねちキスする。
「ちゅ、ちゅ、女だからこそ味わえる快楽を知って、本当の女になってくれたんですもの、チュ、チュ、立ち会えて本当に嬉しいっ、もっと楽しんでティローネ、ああ、愛してるわティローネっ、ノクシウス様の次に愛してるのよティローネッ……チュゥゥ！」
（だ、ダメよママっ、アソコを突かれる上に、ハア、ハアッ、いやらしく胸を揉まれて、んんッ、ねちっこくキスされながら口を吸われたら、い、意識が翔んじゃぅっ！）
瞼の裏に白い光が広がる。
意味もなく、セメントリングを引っ掻き回してしまう。
女性器と胸と口で絶え間なく迸る快楽が、頭の上を突き抜けていく。
それぞれの愉悦が共鳴しながら増大し、魂までも甘美感の固まりにしていく。
「はあっ、はあっ、君の処女マンコ、僕のチンポを情熱的に締めてくるよ、ふぅ、ふぅっ、そろそろ終わりにしようじゃないか、敗北陵辱快楽に浸りながら僕のザーメンを受け入れるんだ、ハアッ、ハアッ、君のママやクリスタ、スズネと同じになるといい！」

自分の股間でティローネの股間をグイグイ押し、子宮口を突き上げながら捏ねる。
ビクンッ、ビクンッ、ググググ、ビグビグビグ、ググググッッッッッッ！
強い女たちを軍門に下らせてきた巨根が根本から激しく震える。
総身を膨らませ、大量の濁液を発射しようとする。
（んっ、ぷぷッ、ハァッ、ハァッ、ま、負けないっ、み、皆を助けるんだから、あああぁ、はあっ、んむっ、プチュッ、負け、ないっ、あぅっンン、はぁふぅぅあッ……！）
皆と同じにするという言葉で僅かに戻った反骨心を原動力に腰を揺すり、もがく。
「ムダムダ。ウェレクンダ、押さえつけてるんだよっ、ハアハア、さぁとどめだッ！」
牝奴隷と化している母は従順に動いた。声も出せないほどべったり唇をつけ、娘の口内を吸い、胸を責め立て、快感で身体を脱力させ、抵抗を封じる。
（負けたくないっ、負けたくないいいいいっっっっ！）
胸中で悲鳴を上げるティローネだが、意志に反して身体はふわりと軽くなる。
母と仇が与える快楽が、なけなしの抵抗心すらもドロリと溶かす。
「オオオ！　締まるっ、君の処女マンコが僕の王様チンポを締めつけてるよ、はあ、はあ、チンポの隅々が押し潰される……くぅぅッ！　もう終わりだ！　イって心の力が弱まった君は、僕の力に逆らえない！　母と友人も注がれた僕の王様精液をたっぷり受けながら剣闘娼婦に堕ちろ！」
ノクシウスの瞳が金色に変わる。洗脳【能力】を発動させたのだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一!エロラノベ&エロコミック満載!!

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

絶好調♥不思議Hコミック誌 増ページ特大号!

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

ヒロインが淫らに堕ちまくるアンソロジー!

COMIC UNREAL コミックアンリアル

メガミクライシス MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。